

道徳学習資料 平成28年1月編

問題解決的な道徳学習のルーツ その出発点はアメリカの人格教育にあり

『私たちの道徳』にある資料「ブランコのりとピエロ」を使い、B11〔相互理解, 寛容〕を問題解決的に指導する授業の展開例を目にしました。

- 1 苦手な相手について想起する。
- 2 資料の範読を聞く。
- 3 本時の学習課題を決める。

ピエロは本当にブランコ乗りのことを許したのだろうか

- 4 ワークシートに考えを記入する。
- 5 学習課題について話し合う。
「許した」「許さない」の話し合い
- 6 自分にとって「相手を受け入れる」とはどんなことかを考える。
- 7 「私たちの道徳」P81を読み、どれが自分に当てはまるのかを考える。

これもありかと思いますが、テーマ発問の授業とどこが違うのか、私にはよく分かりません、道徳的な価値を学ぶことができれば、授業スタイルはいつでも良いのですが、それでも、今改訂で道徳の授業として「問題解決的」とあえて取り上げられた背景は知っておきたいものです。きっと、今後、授業を構想する時に役立つはずです。

中教審の道徳専門部会で問題解決的な道徳学習を提案している方が岐阜大の柳沼良太氏です。氏は、2010年に1年かけて「人格教育の父」と呼ばれるトーマス・リコナー博士の下でアメリカ各地の学校を視察し、人格教育の実際の様子を学んでみえます。少し古いですが、リコナー博士の著書『心の教育論』（慶応義塾大学出版会 1997年）から、そのプログラムの一端を紹介します。

リコナー博士は、葛藤解決を教える場合の

カリキュラムとして、次の指導課程を示しています。

- 1 葛藤解決カリキュラムを用い、葛藤の原因と非暴力的葛藤解決方法を教える。
- 2 葛藤回避とその解決に必要な特定の社会的技能展開過程で子供を指導する。
- 3 クラス・ミーティングを開催し、葛藤の原因を討論し、公正に、また暴力に訴えずに、葛藤は解決されるべきだという価値観を確立する。
- 4 新しく学習した葛藤解決技能を用いる際、子供に援助する必要がある場合は、「介入」する。
- 5 運動場などで「葛藤介入者」として進んで動ける子供には特別な訓練をする。
- 6 喧嘩で校長室などに送り込まれてくる子供には、葛藤の仲裁課程を設けて、教室指導を強化する。
- 7 外部からの仲裁を待たないで、自分たちの葛藤を解決するという目標に向けて子供を徐々に前進させる。

1の葛藤解決を教える計画的カリキュラムでは、各自にワークブックを与え、各章の授業の話し合い準備として、喧嘩を含む様々なシナリオに対して喧嘩が起こると思う理由を列挙させたり、喧嘩をうまく避けられた時のことを文書で書かせたりします。

「身体的暴力は、喧嘩の下手な仕方と決まっている」という章の授業では、AとBが会話から発展した悪口の言い合いで喧嘩が始まり、周りが喧嘩を助長するようにはやし立てたというケースを示して、次の質問表に各自が予想した結果と、その結果に対する各自の評価をプラス・マイナスで記入させた上で授業に臨みます。

- ・ Aはどうなるか。
- ・ Bはどうなるか。
- ・ 教師はどうするか。
- ・ 校長はどうするか。
- ・ AとBのことを他の子供はどう思っているか。

その後、子供たちは、「AがBに殴りかかる前に考えたい代替案作り」や「AとBが喧嘩にならない会話への書き直し」を行います。

2の技能訓練では、小グループで協同的な作業活動を行わせる中で、個別に教師がコミュニケーションの仕方を指導します。例えば、

- A 「そんなところにブロックを置くななんてひどい。最低だ。」
- 教師 「AはBが別のところにブロックを置いた方がいいと思っているね。どこに置いたらいいか話してあげてごらん。」
- A 「Bさん、ここに置いた方がいいと思います。～だからです。」
- 教師 「Aの提案をあなたが受け入れてくれるのならブロックを動かしていいし、あなたが置いているところがいいと思うなら動かさなくてもいいですよ。」
- 教師 「(Aに対して) あなたはひどいとか最低という言葉を使わないようにすれば、皆はあなたの言うことを受け入れてくれるようになりますよ。」等々

このように、話を聞くこと、感謝を伝えること、質問すること、会話を始めること等の社会的技能を個人・小グループで指導します。

3のクラス・ミーティングは、葛藤解決技能を教える場合と、実生活における葛藤を解決する際の両方で活用されます。

- 1 特定の葛藤(取り上げる問題)の全体像を教師が学級全体に詳細に伝える。
- 2 問題の発生原因(何がこれを引き起こしているか)について話し合う。
- 3 問題に対して一人一人がどう思っているか発表させる。

- 4 問題解決のために可能な最善の方法について討議する。
- 5 最善だと考えられる方法のロールプレイを行い、その良し悪しを検討する。
- 6 それを実生活で通用させるために必要なことを話し合っ明かにする。

低学年では、操り人形を使っておもちゃの取り合い、仲間はずれ、悪口などのもめ事をドラマにして示したりします。そして、シナリオ実演後に教師は次の質問をします。

- 1 この場面では何が起こったのか。
- 2 他の人たちはどう思ったのか。
- 3 この問題を解決する他の方法には、どんなものがあるのか。
- 4 この問題をみんなが抱えたらどうすべきか。

リコナー博士は、アメリカで日本のような学級指導が必要だと言いだした人です。人格教育は、麻薬、殺人、性犯罪等を抱えるアメリカで効果あるプログラムとして国の施策で行われ、韓国を始め世界各国で取り入れられています。今回、その流れで日本の道徳教育の改善策の一つとして導入されようとしています。日常生活と授業を結び付けたり、学んだことの実効性を高めたりするためには、授業で、問題の所在や、葛藤を解決するための最もよい行為の選択肢、行為や習慣に移す際の課題を明らかにする必要があります。

そう考えると、「ブランコのりとピエロ」の指導は次のようになるのかもしれませんが。

- 1 他人を許せなかったことはあるか。
- 2 資料範読
- 3 二人の間で問題となることは何か。
- 4 ピエロがブランコ乗りを許したのはなぜか。
- 5 考えが対立する人を許すためにはどうすることが必要か。
- 6 あなたはそれを実行できるか。